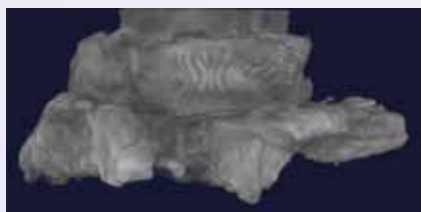


この写真は、象嵌装大刀のCT写真です。平成18年に鹿児島県埋蔵文化財センターでX線のレントゲン写真によって、象嵌技法の存在については確認されていましたが、詳細は不明のままでした。その後、平成22年に九州国立博物館でCT画像を撮影したところ、詳細な文様を確認することができました。心葉文はハート形をしています。実は、中国の空想上の生物である鳳凰が羽を広げて休んでいる形を表現しています。



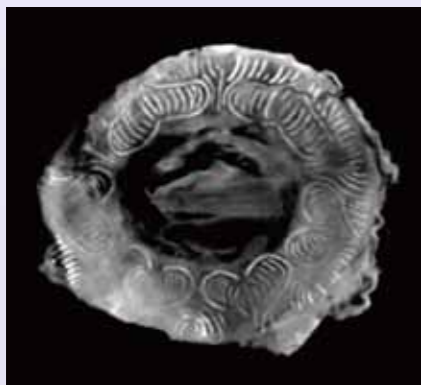
象嵌装大刀のハバキ部分 (CTスキャン)

この刀は、象嵌装大刀といって、象嵌技法が施されている大きな刀という意味で、鹿屋市吾平町の中尾地下式横穴墓群で発見された今から約1500年前の古墳時代の刀です。象嵌とは、「象」がかたどるという意味を持ち、「嵌」がはめるといった意味を持っていることから、異なる材質同士を嵌め込む技法のことです。この刀には鉄に銀が嵌め込んであります。刀のツバとハバキに心葉文、ハバキの上部と柄頭の金具に2重半円文が施されています。鹿児島県では象嵌技法が施された出土品としては初めての発見となりました。また、ツバに心葉文を持つ刀は全国でも16例目、九州では4例目と大変貴重な出土品です。しかし、出土時はこのようにサビに覆われていて、実はあまり注目されていませんでした。



発掘当時の象嵌装大刀

象嵌装大刀の全てが解る！



象嵌装大刀のツバ部分 (CTスキャン)

今蘇る、1500年前の輝き。忠実に再現された象嵌装大刀。再現レプリカは、材質や大きさだけでなく、1500年前の人々の製作方法まで再現して作られたものです。(詳しくは7ページ「象嵌装大刀に命を吹き込む匠の世界」をご覧ください) 象嵌装大刀を持っていた人については、実はまだ詳しくはわかっていません。象嵌装大刀は、鹿屋で作られたものではなく、朝鮮半島からの渡来品か大和地方で製作された物が、中央政権との交流により与えられたものであると考えられています。



これは実物の象嵌装大刀の写真です。奈良県の(財)元興寺文化財研究所に委託をし、ツバとハバキ部分のサビの除去を行い、1500年前の象嵌技法を確認できるようになりました。



ツバ部分にほどこされたハート形の心葉文が特徴